

鯨 研 通 信

第 322 号

1979年 1月

財団法人 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京(642) 2888 (代表)
日本鯨協会の



ヨウスコウカワイルカ (5)

— 頭骨と胃の構造にみられる特徴 —

東京大学医学部 神谷敏郎

ヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*) についての一連の報告——1916年の *Lipotes* の発見から第二次大戦前における欧米の学者による研究の背景、戦後の新中国における研究成果まで——を本誌上で4回に亘って行った。76年夏から77年秋にかけてのことであった(303、308、309、311号)。この報告書のもとめの中で筆者は近年中国の研究者の手によって明らかにされた *Lipotes* についての研究成果と、当時われわれが進めていた淡水イルカについての研究所見とを比較して若干の問題点を提起し、また、中国における今後の研究の一層の発展を願って筆をおいた。

その後この報告書は、中国の研究者との学術交流の糸口になればと考え、筆者の手元に集められていた本邦および諸外国の研究者による淡水イルカについての研究論文の別刷や複写を添えて、北京、上海、南京および武漢の研究機関に送った。これに対して各研究機関からは礼状と、併せて淡水イルカ以外の鯨類の研究論文の所在やその複写の入手方法についての問い合わせを受けた。先方の求めている論文の中には鯨類研究所刊行の *Scientific Reports of Whales Research Institute* に掲載された論文も多く含まれていた。*Lipotes* に関しては南京師範学院生物系の周開亜博士および湖北省水生生物研究所の陳宜瑜博士との交流を得ることができた。両博士とも先の報告書で紹介した中国論文の著者で、*Lipotes* の研究では中心的な活動をされている方々である。

昨78年11月末に周開亜博士からの手紙を受取った。用件は「最近行った *Lipotes* の骨格と胃の構造についての研究成果をまとめた第一報を別送したので検討して欲しい」とのことであった。そして数日後にここ

で紹介する「ヨウスコウカワイルカの骨格と胃に関する研究の新たな進展」と題する論文別刷が送られてきた。期待していた論文なので早速に手がけてみた。といっても筆者の中国文解読力は微々たるものなので、この道に秀れている人の協力を得てなんとか読み終えることができた。

今回送られてきた論文は予報というか速報であって、近く正式の論文が印刷になるようである。正論文の段階でわれわれの行っている淡水イルカの研究結果と比較検討を加えてみなくてはならないが、何分にも *Lipotes* に関する研究資料が少ない今日、少しでも早く関心のある方々に紹介してみてもと、再度筆をとることにした。本来なら論文名を表題とし、筆者は訳者とした方が適切であろうが、第一に語学上の点で失格者であり、また前回までのいきさつもあって *Lipotes* についての5回目の紹介とさせてもらった。

論文の内容はこれまでのように逐語訳的とし、終りに若干の私見を加筆した。また、文中の付図は理解し易くするため筆者の判断で付号をつけ変えたり、図の配置を組み変えた箇所がある。さらに、随所に4種のカワイルカの比較がでてくるので、読みやすさの便を考え種名は下記のような学名で統一した。

ヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*) =
Lipotes
アマゾンカワイルカ (*Inia geoffrensis*) = *Inia*
ガンジスカワイルカ (*Platanista gangetica*) =
Platanista
ラブラタカワイルカ (*Pontoporia blainvillei*) =
Pontoporia

ヨウスコウカワイルカに関する研究の新たな進展*

南京師範学院生物系

周開麗 錢偉娟 李悦民

ヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*) は中国だけに生息している極めて珍らしい動物である。*Lipotes* はかつて新生代中期および前期に広く分布していた動物類に属し、現存するイルカの中で最も原始的な形質を保持している種類で、ジャイアントパンダ (*Ailuropoda melanoleuca*) 同様に重要な学術的意義を有する動物である。中国では *Lipotes* を含む稀少動物の保護と研究に力が注がれている。新中国が誕生してまもなく *Lipotes* に関する調査研究が始まり、すでに「長江下流で発見されたヨウスコウカワイルカ」、「ヨウスコウカワイルカの形態・解剖に関する若干の資料」、「ヨウスコウカワイルカの分布調査」等の論文が発表されている。

諸外国の動物学者は *Lipotes* に関する研究の進展に強い関心をよせている。1970年代に入ってから、米・蘭・英・スイス・日本等各国の学者が淡水イルカの研究論文の中で *Lipotes* の研究史を評述し、また若干の研究結果を報告している (Brownell & Herald, '72; Bree & Purves, '75; Brownell, '76; Pilleri & Gühr, '76; 神谷, '76)。さらに、東京大学の神谷政郎氏は中国の研究者の発表した2篇の論文を翻訳し「鯨研通信」に紹介している。

われわれは *Lipotes* に関するこれまでの研究を基礎にして本種の骨格と胃についての観察と研究を行い、その結果を2篇の論文にまとめた。この論文は近く刊行の予定であるが、ここにその主な内容を簡単に紹介する。

1. 骨格にみられる特徴

本種の骨格についての研究報告は外国に5篇 (Miller, '18; Fraser & Purves, '60; Brownell & Herald, '72; Kasuya, '73; Bree & Purves, '75)、国内に1篇 (陳宣瑜と陳焯, '75) がある。これら6篇の論文に記述されている所見は限られた標本についての観察結果のため、不十分な点や誤りがみられる。これら先

人の研究の不備な点を補うため、今回は5組の全身骨格と、別の4個体の頭骨について詳しい観察と計測を行い、本種の骨格にみられる特徴を正確にとらえるよう努力した。

1918年 Miller は本種とアマゾンカワイルカ (*Inia geoffrensis*) の骨格と比較検討し、両種の骨格に多くの類似点を見出し *Lipotes* を *Inia* と近縁のイルカであると考えた。その後発表された5篇の論文はいずれもこの Miller の観点を支持している。しかしながらわれわれの観察結果では次に述べるような多くの点で、*Lipotes* の頭骨・脊柱・胸骨・肩甲骨および前肢骨には *Inia* の骨格との間に明らかな相違点が見られ、*Lipotes* と *Inia* との近縁関係を立証することはできなかった (頭骨については次頁の表と図1を参照)。

耳囲骨 (鼓室骨) と頭骨の連結様式

Fraser & Purves ('60) および Kasuya ('73) はいずれもカワイルカ4種の耳骨の研究の中で、ガンジスカワイルカ (*Platanista gangetica*) の耳囲骨のみが頭骨と直接連結していることと、*Lipotes*、*Inia* および *Pontoporia* の耳囲骨は頭骨とは直接の連結を失っていることを指摘している。この点われわれの観察によると *Lipotes* の側頭骨鱗部腹側の鼓鱗骨のくぼみの背側にある三角形の部分には、骨質が疏で疊片状をなす部分があって、この部位で耳囲骨の乳様突起が頭骨とゆるやかであるが直接的に連結を保っていた。したがって、Fraser & Purves および Kasuya による *Inia* と *Pontoporia* についての観察所見は妥当であるが、*Lipotes* の耳囲骨と頭骨との間の連結方式は *Inia* および *Pontoporia* とは異なり *Platanista* に類似した連結をとる点を指摘したい。

脊 柱

本種の脊柱は頸椎7個、胸椎10~11個、腰椎4~8個、尾椎19~21個、計41~45個の椎骨が組み合せて構成されている。このうち胸椎で肋骨が着く面 (肋骨窩) を比較してみると、第1胸椎では椎体両側の前縁と後縁に肋骨窩があり、第2~5胸椎では椎体後縁にのみ肋骨窩がみられ、第6胸椎になると後縁の肋骨窩も消失してしまっているか痕跡的に残っているにすぎない。さらに第8~11胸椎においては椎体の肋骨窩は消失し横突越の肋骨窩だけが肋骨と関節しているにすぎない。

図2が示すように *Lipotes* と *Inia* の後位 (尾側) の胸椎では両種とも椎体の肋骨窩を欠く。これに対して中央部の胸椎の椎体肋骨窩には差がみられ、

* 南京師範学院報 (自然科学版)、1978年第1期、8~13頁、1978年。

頭骨にみられる特徴の比較

Lipotes

鋤骨は吻前半部では口蓋面に一部が露出しているが、吻基底部（歯槽を欠く部位）においては左右の上顎骨で覆い隠されている。

頭頂骨と翼状骨との間には側頭骨鱗部の突起が介在して両骨を隔て、突起の先端は前頭骨と接合している。

左右の口蓋骨は口蓋の正中でじかに接合していて、その間に鋤骨の介在をみない。

翼状骨の翼突鉤には外頭蓋底に孔のあいた薄い骨端部があって背側に巻貝のように折れ曲がり、その外側縁は口蓋骨外側の遊離縁と接し、そこに内腔をもつ。

Inia

鋤骨は吻の口蓋面では左右の上顎骨に覆われることなく、内鼻孔前縁にいたるまで全長に亘って露出している。

頭頂骨と翼状骨は直接に縫合していて、前頭骨と側頭骨鱗部とは完全に分離されている。

左右の口蓋骨の間には鋤骨が介在しているため、口蓋正中部での接合はみられない。

翼状骨の翼突鉤には外頭蓋底に背側に巻くように折れ曲がる薄い骨端部はなく、内鼻孔腹側縁に不規則な小突起がみられるだけである。

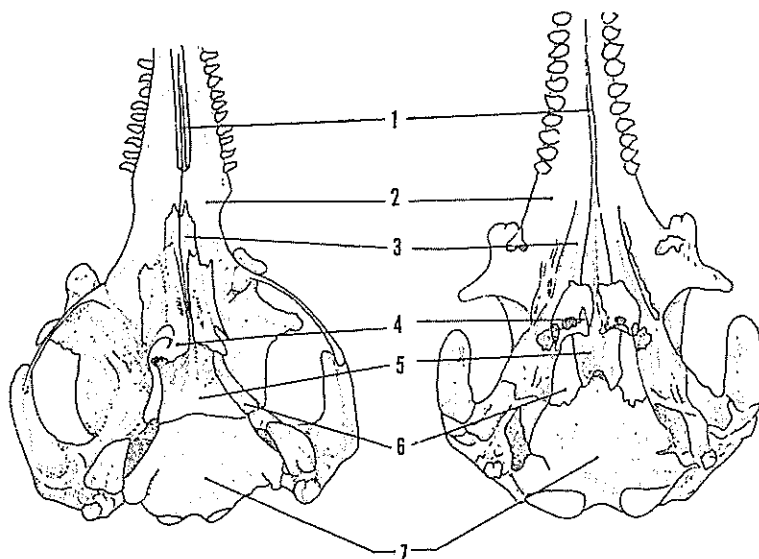


図 1 淡水イルカ頭骨の比較（外頭蓋底）

左：ヨウスコウカワイルカ

右：アマゾンカワイルカ（Flower の論文（1869）より引用）

1) 鋤骨 2) 上顎骨 3) 口蓋骨 4) 翼状骨の翼突鉤

5) 鋤骨 6) 翼状骨 7) 後頭骨

Lipotes では横突起の肋骨窩と組み合わさる椎体の肋骨窩は一つ前の胸椎の椎体後縁にある。*Inia* の肋骨窩は同一椎体の前縁にみられる。さらに両種の乳頭突起にもはっきりした差が認められ、*Lipotes* の乳頭突起は斜め頭側に長く突出しているのに対して、*Inia* の乳頭突起は短く、鈍三角形の突起をなしている。

胸骨

胸骨

本種の成体の胸骨は梯形に似た骨板で、左右の対称

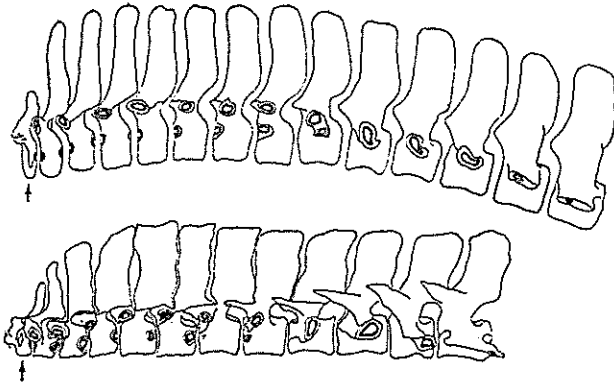


図2 淡水イルカ胸椎の比較(左側面)

上:アマゾンカワイルカ(Flowerの論文(1869)より引用改変) 下:ヨウスコウカワイルカ
矢印は第7頸椎を示す

は不完全である。腹側面は扁平もしくはややくぼみ、頭側端は左右へ広がったうえ背側にゆるくカーブしている。中央部のやや頭側寄りにしばしば一個の小さい孔がみられる。また尾側はやや背曲している。*Inia*の胸骨は不規則な楕円形を呈していて、頭側縁は狭くて深くへこみ、頭側部両側の腹外側部には明瞭な三角形の突起がみられる。

肩甲骨

本種の肩甲骨は斧形を呈し、その頭側縁と椎骨縁とはほぼ直角に交わる。肩峰は幅広く、その先端部はやや尖がっている。鳥口突起は比較的細い。この点*Inia*の肩峰および鳥口突起はともに非常に広く、その先端も広がっている。

前肢骨

手根骨は4~5個の骨からなり、このうち近位列は2個、遠位列は2~3個の骨で形成され、尺腕骨と考えられる小さい骨があって、尺骨先端の尺側に癒着している。中手骨は5本で、第5中手骨の尺側には丸いボタン状の突起があり、このため第5中手骨は独特の形をしている。この突起は豆状骨に相当する部分が第5中手骨と癒合してできたものと考えられる。*Lipotes*以外の3種のカワイルカではこのような尺骨の遠位端に癒着した小骨はみられないし、第5中手骨に丸いボタン状をした突起も存在しない。*Inia*の手根骨は6個あり、また第5中手骨の近くに第6中手骨がみられることがある。

2. *Lipotes* の胃

本種の胃については、これまでに2篇の論文において若干の所見が述べられているが(Hinton & Pycraft,

'22; 陳宜瑜と陳焯, '75)、その構造はまだ正確に明らかにされていない。そこでわれわれは本種の胃について肉眼解剖学および組織学的な観察、研究を行なった。

鯨類の胃は通常、前胃・主胃・連接管・幽門胃の4つの部分で構成されているが、*Lipotes*の胃では前胃を欠き主胃は3つの室に分かれ、主胃と幽門胃との間には連接管にあたる部分はない。これに対して *Platanista*の胃は前胃・2つの室からなる主胃・通道および幽門胃からなり、この通道は連接管に相当する。*Pontoporia*の胃は *Lipotes*同様に前胃を欠き、しかも単一の主胃・連接管および幽門胃の3つの部分のみで構成されている。*Inia*は前胃を有する胃をもっているが、

その先の部分の構造についてはまだ報告がないようである。表1および図3は *Lipotes*の胃の構造が他のカワイルカの胃の構造と比較してどのような特徴をもつかを示している。

組織学的な観察所見としては、*Lipotes*の主胃起始部における噴門腺の発過が *Platanista*および *Pontoporia*よりはるかに良い点を明らかにした。また *Lipotes*の主胃粘膜では胃底腺と交錯して分布する粘液腺の存在が認められた。鯨類の胃粘膜におけるこのような組織像はわれわれによって初めて見出されたものである。さらに *Lipotes*の噴門腺・胃底腺・主胃粘液腺および幽門腺のいずれにおいても嗜銀細胞の存在を証明し得た。

3. *Lipotes* の分類上の位置

60年前 Miller が *Lipotes* は *Inia* の同類(近縁)であると断定して以来、Hinton & Pycraft ('22)のみがこれに疑問をなげたが残念ながらその論拠が当を得ず、鯨類学者の受け入れるところとならなかった。その他の研究者は *Lipotes* の分類帰属問題においては皆 Miller の観点を踏襲をし、*Lipotes* をアマゾンカワイルカ科 (Iniidae) もしくはアマゾンカワイルカ亜科 (Iniinae) に組み入れている。

Miller ('18) の説の根拠となった *Lipotes* の標本は、1個体の不完全な頭骨と7個の頸椎のみであったため、彼の結論は資料不足の影響を蒙っている。Fraser & Purves ('60) の主張は主に聴覚器に關与する骨組みの観察結果を基礎にしてたてられている。われわれはこれら先人の業績を検討し、そこに挙げられている特徴について分析を試みたが、これらの特徴に

表 1 淡水イルカ胃の区分の比較

種 類	前胃	主胃	連接管* 幽門胃	
ヨウスコウカワイルカ	0	3	0	1
ガンジスカワイルカ	1	2	1	1
アマゾンカワイルカ	1	?	?	?
ラブラタカワイルカ	0	1	1	1

* 山崎ら ('71) は結合部と呼んでいる。

かくて、*Lipotes* と *Inia* の骨格の比較によって認められる差異は、この2種類のカワイルカが一定の距離をもって相隔てられていることを示している。とりわけ胸椎における肋骨小頭が関節する位置は、胸郭の強化にとって重要な影響をもつもので、この構造は *Lipotes* が水生に適応したかなり早い段階で分化が生じた形状に違いない。耳咽骨と頭骨との連結方式も水生の環境下における聴覚器官の適応変化の程度を示しているといえよう。

Lipotes には前胃がなく、*Inia* は前胃を有し、呼吸孔は *Lipotes* では縦に長い円形であるのに対して *Inia* では横たわった新月形を呈している。このような兩種間にみられる外部構造や内臓器官にみられる相違も兩種の間に明確な隔りがあることを表わしている。このように *Lipotes* と *Inia* とは進化の過程において早期に各自の適した方向へ分化を示したもので、*Lipotes* の分類上の位置は再考慮されるべきものであると考える。

Lipotes の骨格にみられる、a) 顔面が平らで狭い b) 頬骨突起の発達が良い c) 頭蓋腔が比較的小さい d) 側頭窩が広い e) 後頭骨・前頭骨の縫合が眼窩の前まで張り出していない f) 左右の下顎枝の縫合面が長い g) 7個の頸椎が完全に分離している h) 上腕骨が前腕骨よりも長い i) 尺骨に肘頭を欠く、といった先祖伝来の特徴により *Lipotes* は疑いもなく淡水イルカ総科に帰属するが、同時に上述の特徴からガンジスカワイルカ科 (*Platanistidae*) またはラブラタカワイルカ科 (*Pontoporidae*) に属するイルカでないことも示しているといえよう。これらの特徴から、われわれは *Lipotes* はもう一種の古代の歯鯨の現存する代表であって、新たにヨウスコウカワイルカ科 (*Lipotidae*) を設けて区別すべきであるとする説を提唱するものである。

主要参考文献

15篇の論文が引用されているが、前回までの報告書

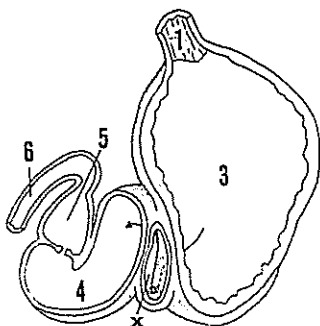
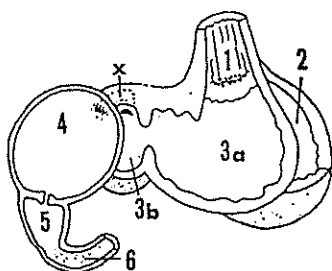
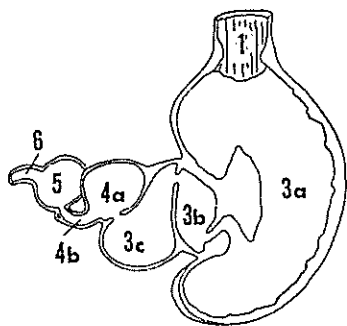


図 3 淡水イルカの胃の内景を示す模式図

上: ヨウスコウカワイルカ 中: ガンジスカワイルカ 下: ラブラタカワイルカ (ガンジスおよびラブラタカワイルカの図は山崎らの論文 ('71, '74) より引用)

- 1) 食道 2) 前胃 3) 主胃 3a) 主胃第一部
- 3b) 主胃第二部 3c) 主胃第三部 4) 幽門胃
- 4a) 幽門胃球状部 4b) 幽門胃管状部 5) 十二指腸球部 6) 十二指腸 x) は連接管 (結合部)

のみ頼って *Lipotes* の分類を決めるのは客観性に欠けることを摘したい。Kasuya ('73) のたてた仮説の主な根拠は *Lipotes* の耳咽骨と頭骨との連結が *Inia* と同様に直接連結を失っているという点を重視してたてられたもので、この点はすでに指摘したように *Lipotes* の耳咽骨と頭骨とが直接連結しているといえることから、この特徴も *Lipotes* と *Inia* の近縁関係を立証する根拠としては妥当性を欠くといえよう。

に出てきた論文は重複をさけるため省略し、今回新たに引用された論文のみに限定してみると次の4篇があげられている。

- 1) 生物系動物学教研組：ヨウスコウカワイルカの調査研究。南京師学報自然科学増刊、37~48、1975。
- 2) Brownell, R. L. Jr.: Conservation of the white-flag dolphin, *Lipotes vexillifer*. Symposium of advisory committee on marine resources research scientific consultation on marine mammals. 1976.
- 3) Fraser, F. C. and Purves, P. E.: Hearing in cetaceans, evolution of the accessory air sac and the structure and function of the outer and middle ear in recent cetaceans. Bull. Brit. Mus. Nat. Hist. 7(1): 1~140, 1960.
- 4) Kasuya, T.; Systematic consideration of recent toothed whales based on the morphology of tympano-periotic bone. Sci. Rep. Whales Res. Inst. 25: 1~103, 1973.

文 抄 録

英文の題名と著者名および所属は

Recent advances in the study of the Baiji, *Lipotes vexillifer*. by Zhou Kaiya, Qian Weijuan and Li Yuemin (Department of Biology, Nanjing Normal College)

、5行の短い要旨が書かれている。論点はヨウスコウカワイルカ科新設の主張である。

あ と が き

最近入手した *Lipotes* に関する中国からの論文の紹介を試みたが、今回の訳については自信がもてない。というのは、骨の名称やその突起とかくぼみの用語が充分理解できなかった点があるからで、大意は誤らないと思うが、細かい点については、近く刊行されるであろう本論文に目を通していただきたい。論文をこまめに終えて若干の補足と意見を述べてみる。

骨格については今回の論文で指摘されたように、これまでの研究は限られた標本についての観察であっただけに、欠点のあった点はいたしかたのなかったことである。基準標本を同定した Miller も1個体の頭骨：頸椎から能う限りの所見を導き出した。また、その他の研究者も同じ努力を重ねたが、この種の研究には必ず例数を多くみることと同時に、性差と年齢差と

どうか発育段階の異なる標本の比較検討を欠すことができない。この点多数例を比較検討した上での今回の所見は、カワイルカについての今後の研究に貴重な資料を提供することになろう。例えば鋤骨について *Lipotes* と *Inia* の間に差があるという指摘は、この部位の骨の組合せはイルカの成熟度によって変異に富む個所の1つであるだけに、対象標本の骨年齢の吟味がどのように加味された上で結論を出されたのか是非知りたいことである。

胃については *Lipotes* には *Pontoporia* と同じく前胃がなく、食道下端が主胃と直結していることを知り得た。前胃は食道胃ともいわれ、その内壁は食道の続きで重層扁平上皮で覆われ消化腺を欠く。したがって、前胃は食道の末端がふくらむ状を呈してつくられ、一時的に食物を貯え機械的消化を行う部分とされている。*Inia* と *Platanista* には他の歯鯨やヒゲ鯨同様に前胃が存在する。もっとも歯鯨の中でアカボウクジラ類のみは前胃を欠く。Slijper ('62) のようにアカボウクジラ類がイカのように柔らかく餌をとるために、機械的消化を分担している前胃を欠くとの見解を述べている学者もいるが、カワイルカ4種は食性とは無関係に2種が前胃を備え、2種が前胃を欠くという非常に興味のある結果を示す。

Lipotes の胃粘膜が顕微鏡下で観察された点は注目値する。ただ今回の報告内容が速報だけに文全体が簡略されていて十分な説明がなく、胃粘膜の構造に合点のいかない記述もみられる。例えば主胃の粘膜には固有胃腺の他に独立した粘液腺の存在を示唆する個所があるが、顕微鏡を間において討論したい念にかられる。同じく胃粘膜に嗜銀細胞の存在が指摘されているが、この細胞は染色の過程で銀でよく染め出される顆粒を含む銀親和性細胞で、基底顆粒細胞と呼ばれ、内分泌に関与する細胞で胃ではガストリンなどのホルモンを分泌している。筆者らもカワイルカの胃について組織学的観察を行ってきたが、基底顆粒細胞については十分な観察を行ってこなかったため、今後検討を加えていきたい。

本種の分類上の位置付けの点は、科とすることは別としてヨウスコウカワイルカに独立性をもたせることは妥当であると考え。従来 *Inia* との類縁関係が強調されてきたのは、限られた標本についての観察結果であって、このような例は良くみられる事例である。*Lipotes* の標本が整えられ、研究が進展し、基産地の中国の研究者による提唱だけに *Lipotes* も喜んでいるのではなからうか。分類学には少しでも異なる形質が

あると別の種類に細分化していく考えの人 (Sliter) と、細部の違いには余りこだわらず、共通の特徴を重視してまとめていこうとする考えをもつ人 (Lumper) とがいるので、研究者の態度によって主張が異なることがままある。カワイルカの取扱については1科4属4種または5種にしている。日本の鯨類学者は4属4種に近親感をもつ人が多く、世界的には5種 (Marine Mammal Commission の見解) が強いようである。この4種か5種かという点は、ガンジスカワイルカを、ガンジス河とインダス河に棲息している個体を別種とする主張をスイスの Pilleri ('71) が唱え、この取扱いをめぐる Sliter と Lumper とに分かれたからである。ともかく、*Lipotes* と *Inia* との間に隔りをおいて考えていくことには異論を唱える学者はなからう。

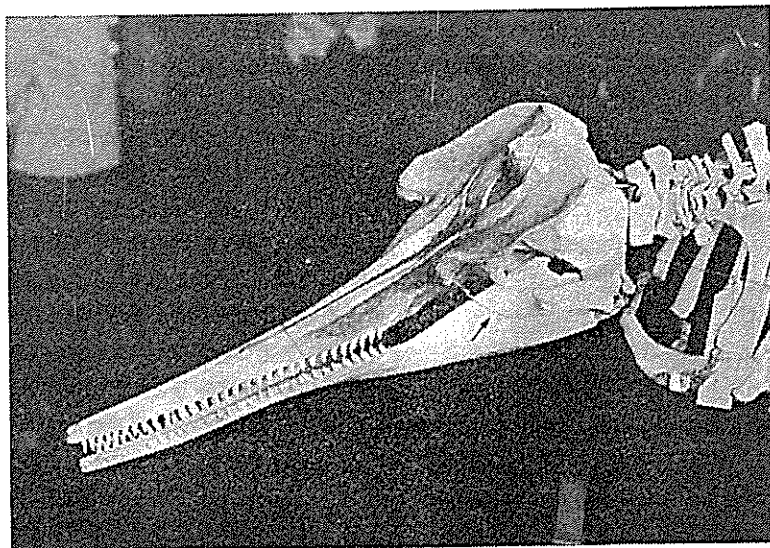
中国語では *Lipotes* は 白鬚豚 と書かれてきたが、今回の論文からは白既豚となった。鬚が簡略化され、下段の魚がとられ既のみとなったため、魚と縁が切

れてすっきりもした。ちなみに他のカワイルカを含めてまとめてみると

種 類	漢 字	ローマ字式表現
ヨウスコウカワイルカ	白既豚	Baiji
アマゾンカワイルカ	亜河豚	Yahetun
ガンジスカワイルカ	恒河豚	Henghetun
ラブラタカワイルカ	拉河豚	Lahetun

となる。

下の写真は上海自然博物館所蔵の *Lipotes* の骨格標本 (体長、性は不詳) で、神戸中華同文学校の周達生氏撮影のものを掲載させていただいた。立派な標本で、側頭骨と涙骨の間に張っている細い紐状の頬骨 (矢印) も完全に保存されている。



あ し た せ

前にもこの欄で紹介したことのある、くろしお文化、の第8集がこのほど刊行された。千葉県勝浦市黒潮資料館の矢代嘉春さんの編集である。50ページの小冊子ながら、今回も内容は盛りたくさんである。先づ近世密貿易史秘話として、ツェンペリー紀行と元順号始末がある。安永9年に千倉に漂着した清国の元順号の遭難事件から始まって、話は当時の密貿易に発展する。その根底をなしているのがツェンペリーの日記で

ある。

もう一つの維新史として、幕艦開陽丸建造前後、がある。これも矢代さんの稿であるが、この外に飯盛汪太郎さんの、幕艦視光丸の新発見図について、と大場俊雄さんの、カリフォルニアのアワビ漁業に従事した日本人がある。共に貴重な文獻である。

しかしながら矢代さんの面目躍如として出ているのが、テレビ鯨三題である。NHKから放映された鯨に

関係のあるテレビ番組3題を採り上げて、これをというよりも捕鯨そのものを痛烈に批判しているのである。その一は、そうだニーの風見鶏である。これはいわばお茶の間のホームドラマであるからフィクションである。ただ話そのものはフィクションであっても史実を無視しては困るということであろう。矢代さんが特に採り上げているのは、紀州羽刺の輝やかなしい職名が遂に出て来なかったことである。紀州では1人前の羽刺になると納元から太夫名を貰うが、ぎんの父親太兵衛ほどの名羽刺に太夫名がない。たまりかねてNHKに一筆投じたが、いつ迄経っても太夫名をつけて貰えなかったというものである。

その二は、碑の歴史、鯨組崩壊である。これは明治11年の冬に起った、脊美流れを採り上げたものである。碑の歴史というからには、確かに矢代さんのいう通り、漁民の遭難碑ではなくて鯨碑として採り上げた方が良かったのかも知れない。実はNHKから相談があった時私も早合点してそうだと決めこんで、3氏の名を挙げて、この人たちに相談するよう申し入れたのであった。だが結局話は元に戻って私も引っぱり出されて、矢代さんから散々お叱言を頂戴する結果となってしまったのである。

その三は鯨、その文明と文化となっている。ここでは文明と文化の差を論じ、日本の捕鯨には文明はあるが文化はなく、漁業の体質を考え直せと論じているのである。採り上げた番組は、鯨と人間、自然保護か資源利用かである。実は私はこの番組をうっかりして見なかったからなんとも言えないが、矢代さんの文章の面白さは、黒汐資料館と東海大学海洋博物館の比較から始まることである。それも建物や規模そのものではなくて、そこに展示してあるベニス、つまりオチンチンの大小の比較論から始まるのである。我が方は東海大の倍も大きい。1966年8月ベーリング海で獲ったものである。東海大のは79年頃とか聞いた。10年

を経ずしてこんなに差が出来てしまった。これが書き出しであって、これにつり込まれて一気に読んでしまう。なるほどと同感するのであるが、寸し気がかりだ。それはオチンチンの大きさを比較しているが、鯨の種類は問題としてないのである。黒汐資料館のはナガスである。東海大のは私は知らないがイワシか何かであろう。とすれば大きさに差があるのは当然であろう。ただしナガスは現在捕獲禁止であるから獲れない。今度はイワシも捕獲禁止となってしまったから、獲れるのはミンクだけである。ナガスとミンクのベニスを比較すれば正に雲泥の差であろう。従って大きさがこんなに変化した、それも一つの表現であろうと感心するのである。ここで提唱しておられる鯨類博物館の建設には大いに賛成である。

くろしお文化8月号の定価は500円、郵送定価は620円(郵券代用可)であり、申込先は勝浦市串浜黒潮資料館(郵便番号299-52、電話04707-3-1234)である。

博物館に関連してつけ加えたいことがある。それは三重県鳥羽市の海の博物館である。ここから、海と人間という年報が出ている。今年になってから第6号が送られて来た。今回のテーマは海女で中田四郎さんや中山卓さんなどの論文が掲載されている。史実に忠実な論文であり、貴重な資料であるが、私が感心したのは、この本が届いて間もなく、追いかけるようにして一枚の葉書が届いたことである。正誤表である。つまり正誤表を葉書で追いかけてさせたのである。このようなことはなかなか出来ることではない。

鯨研からは英文報告と鯨研通信を刊行しているが、いつも気になるのがミスプリントである。校正をしっかりとやったつもりでも、どこかに潜んでいる。後でミスプリントが発見されても、たいていの場合はそのまま頬かぶりをしてしまう。海の博物館は誠に良心的であると感心した次第である(大村)。